
バカとテストと召喚獣 ~ウチと決意とラブレター~

NYO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと召喚獣 ～ウチと決意とラブレター～

【Nコード】

N2068P

【作者名】

NYO

【あらすじ】

突発的テキスト小説第十弾。美波主人公。

「あれ？　なんでウチは屋上にいるの？」

気がつくともウチは屋上にいた。

落ちかけの夕日。呆然と立っているウチの影が長い。足元を見ると秋風に乗って木の葉が躍っている。

「美波」

秋風に溶けるような真に澄んだ声がウチの後ろから聞こえてきた。だれだろう？　ウチがそう思ったときだった。

ビュウウ。振り向きざまに強く吹いた一陣の風が、ウチの目を閉じらせる。

風が止み、再び目を開けるとウチの前には一人の男子生徒が立っていた。

「アキ」

そうだ。ウチは告白するためアキを呼び出したんだ。

「手紙、読んでくれた？」

「うん。読んだよ」

男の子にしては滑らかな手が、ウチの手に重ねられる。

「美波」

「アキ」

ウチは唇を突き出し、ゆっくり目を閉じる。
アキの手がウチの肩を掴み、吐息が近づいてくる。ついにアキとキ
ス

「やっと……」

ん？ この声は……？

「やっと同性愛に目覚めてくれたのですね！」

「み、美春！？」

「お姉さまーっ！」

「いやああああー！」

p i p i p i p i p i

「……最低の夢だわ」

バチン。ジリリリリと枕元でけたたましく鳴る目覚まし時計を止める。文字盤を見ると、針はタイミングよく午前七時を指していた。

「……あれのせいよね」

ウチは枕元に置かれている封筒に視線を移す。

丁寧にのり付けされた袋には、徹夜で書いたたった一枚の手紙。

「アイツ、どう思うかしら」

バカで、鈍感で、それでいて優しいアイツの顔を頭に思い浮かべる。一度は暴発した経験をかてに、今回は慎重に行く。成功するにしても、失敗するにしても、この思いを絶対に伝えたいから。

「……でも」

だからと言って不安が無い訳じゃない。むしろ、当日となった今だから手紙を出すのをためらう気持ちだ。告白して避けられたらどうしようか……。そもそもこのままの関係を続けていられるのだろうか……。

まだ、一年もある。告白はもう少しあとでもいいんじゃないか……。

「って、何を弱気になってるのかしら。ウチらしくもない」

何事もやってみることが大事よね！

「よしっ!」

パンツ！ 両頬を叩いて自分に気合を入れる。

思いを込めた分だけ重くなったラブレターを鞆にしまい、ウチは部屋扉を開けた。

明日もアキの笑顔が見られるように！

「葉月。ご飯できたわよ」

カシヤツ。トースターからパンがでて来たのを見て、ウチは葉月の部屋に向かって声をかける。

するとテトテトと可愛らしい音が聞こえてきた。うん、来たわね。

「おはよう葉月」

「…………おはようです」

顔の周囲にはわはわと寝ぼけた空気を飛ばしつつ、トロ〜ンとした表情のまま、まだ覚めきっていない目でウチを見る葉月。なんであれで寝癖が一つもないのかしら。

「くんくん…………今日はトーストですか」

「そうよ」

いい加減その癖は止めなさいって言ってるのに。

「ご飯の前に顔洗ってきなさい」

「…………はいです」

コクリと頷いて、洗面所に向かってよろよろと歩く葉月。見ているこちらが冷や冷やする。どこかにぶつけなきゃいいけど。っと、いけないいけない。ウチも早く朝食を作らないと。葉月が顔を洗ってくる間にウチはスクランブルエッグを

ガンッ

「あつっ!?!」

あ、ぶつかつた。怪我が無ければいいけど。

「お姉ちゃん。ごめんなさいです」

「葉月、それは壁よ」

「えへへ。間違えちゃいました」

廊下から聞こえてくる葉月の声に苦笑する。まったく、いくら寝起きとはいえウチと壁と間違えるなんて

「こんなに平坦に出来るなんて……。日本の建築技術は並じゃないです!」

悪意がないのが余計に腹立たしい。

「っと、早くしなくちゃ」

パカ。片手に卵、片手には菜箸を持ちあらかじめバターをひいておいたフライパンの上で卵を割る。卵を片手で割るのも、手馴れたものだ。

カシャカシャカシャと混ぜればすぐに完成。時間がない朝はお手輕で丁度良い。

「お姉ちゃん」

フライパンからお皿に移していると、洗面所から葉月が戻ってきた。

「きちんと顔洗ってきた?」

「はいですっ!」

「じゃあ、お皿運んで」

トトト。料理が乗った皿を葉月が運んで行く。
その間にウチは飲み物の準備をして、すべての料理が食卓に揃った
ところで、二人とも席に着いた。

「お姉ちゃん」

ウチがト ストを一口齧ると、向かい側に座る葉月が喋りかけてきた。

「（ゴクン） なに葉月？」

「昨日遅くまで何をやってたですか？」

「えっ？」

ま、まさかラブレターを書いている間に喋っていた妄想を聞かれちゃった!？」

「おトイレに行く時、お部屋から光が見えたです」

「それだけ？」

「他に何かあるですか？」

「べ、べつになんでもないの」

聞かれてなくてよかった……。

「ちょっと勉強してたのよ」

「そうなんですか」

「お姉ちゃんまだ読み書きが得意じゃないから」

「それは大変ですね」

あはは。自嘲気味に笑うウチ。葉月もそれにつられて笑みを浮かべる。

やっぱり、食事中は笑っているのが一番よね。

「でも」

「なに？」

「『アキ、はい、あーん』って一体何のお勉強ですか？」

いやああああ！ だれか、だれかウチを殺してええっ！

穴があつたら入りたいとはこのことよね！？ 日本語あつてる！？ そんなウチの苦悩を知らず、ハムツと可愛げにトーストを齧る葉月。悔むのはあと！ ここはなんとか誤魔化さないと！

「あーんパンチよ。アンパンチ。葉月も知ってるでしょ？ アンパンマン」

「もちろん知ってますけど、なんでお勉強する必要があるんですか？」

「お、お姉ちゃんは将来、子供関係の仕事に就きたいって思ってるの」

「お姉ちゃんの夢は保育士さんなのですか」
「じ、実はそうなのよ」

ウチの将来の夢は『アキのお嫁さん』なのに！

ああ、本当にそれになれたらどれだけ幸せなんだろう……。

『美波、僕のところに永久就職してくれない？』

キヤーツ！ 一度でいいからアキの口から聞いてみたい！

そしてそして、ゆくゆくは子作りっていう共同作業を二人で

「……お姉、ちゃん？」

いけない。葉月が『お姉ちゃんが壊れたです』なんて目で見てきている。

「それでバカなお兄ちゃんと遊んでるですか。納得です」

「そうなのよ。ほんと、子供っぽくて困るわ」

我ながらもの凄く強引だわ。

「バカなお兄ちゃんも案外子供なんですな」

「そうよ。アキはああ見えてもちゃんちゃなの」

「なら、葉月と趣味があうかもしれません」

「だめよ葉月！」

パンツ。ウチは机を叩いて大声を上げる。たとえ葉月が相手でもこれだけは譲れないんだから！

「ふええ、お姉ちゃん怖いです」

はっ！ なにやってるのよウチは……。

「ご、ごめんね。でも、葉月はああいう風になっちゃダメなの」

なんだか今日は疲れるわ。

本当に告白止めようかしら。うまく行く気がしない。

「あ、そろそろ天気予報が始まる時間ですよ」

「そうね」

ウチは机の上にあったテレビのリモコンを手に取り、ピッとテレビの電源を入れる。

『今日は午後から雨になります』

すると、画面の中で綺麗なお姉さんが丁寧に今日の天気を読み上げた。

……ウチもあの半分でいいから胸が欲しかったな……。

「今日は天気が悪くなるですか」

葉月の顔が少し曇る。

それにしても、雨ねえ……。告白にしてはちょっと嫌な天気だわ。できれば晴れが良かったけど。

あ、そう言えば呼び出す場所を放課後の屋上に行っていたわね。

『アキ』

『美波』

『ウチはアキのことが』

『その前にさ』

『なに?』

『校舎の中に入らない? 雨降ってるからさ』

「変えるべきだわ」

「なにがです?」

「うっん。コッチの話」

なんだかんだ言ってもうだいぶ時間が過ぎちゃったわね。

ちよつと予定が狂いそうだから、手紙の書き換えを優先しますか。
食事は一度くらいならぬいても平気だし。

「葉月」

「なんですか？」

「お姉ちゃん、ちよつと具合が悪いから部屋に戻るわ。心配はしなくて大丈夫よ」

「でも」

「大丈夫だつて。すぐ戻ってくる」

「なら、いいですけどお」

不安げな表情で見ってくる葉月を横目に部屋に戻ると、ウチはすぐに鞆の中を開いた。

ラブレターは、つと……あつたあつた。

ペンと消しゴムを用意して、準備は完ぺき。

「さて、葉月も心配してることだし、なるべく早く書き終わらないとね」

うん。どこにしようかな？

さすがに他の人が見てる前では告白しづらいわよね。かといって、傘をさしながらの告白なんてムードもなにもあつたもんじゃないわ。人がいなくて、かつ屋内の場所というと

「2-Fね」

うん。そこなら誰もいないはず。

隣のクラスは体育会系だからみんな部活に行くだろうし、そもそもウチのクラスは誰も残らないだろうしね。

あ、いや土屋がたまたに残ってるわ。

その場合は……どかせばいいか。

「そつと決まったら」

取り出したラブレターに書いてある『屋上』の二文字を消し、変わりに『教室』と書きなおす。

いや、アキのことだからどこに行くかわからないわ。

ここはきちんと『2・F』と書くべきね。

サラサラサラ

「よし、完璧！」

ラブレターを鞆に丁寧にしまいこみ、ウチは部屋をでようとする。

あ、その前に

「折りたたみ傘、持っていないかね」

部屋の窓から外の天気を見る。

見上げた空は蒼く、雨が降りそうな気配は少しもない。だというのに、日本の天気予報は当たるから不思議だね。

つと、いけないいけない。早くしないと。

壁にぶらさげてあった折りたたみ傘を鞆にしまい、葉月が待つリビングへと戻る。

「やけに時間がかかっていた気がしますけど」

「折りたたみ傘探してたのよ。ほら、天気予報で言ってたでしょ」

時間は　大丈夫。これなら食事をしてから行っても充分間に合うわ。

ウチは食卓に座り、食事を再開する。

「葉月、ケチャップとって」

「はいですっ」

「ありがとうございます」

スクランブルエッグにケチャップをかける。

そういえば、初めての時は緊張しすぎて感じられなかったけど、フ
アーストキスってレモンの味って言うわよね。もしかして、今回キ
スするときも、そんな甘酸っぱい味が

「お姉ちゃん！」

「えっ！？ な、なに葉月？」

「お皿、真っ赤つかですよ」

え……あちゃあー、やっちゃった。

「本当にだいじょぶですか？」

「いいの。今日はこうして食べたい気分なの」

……酸っぱいなあ。

2 - F 教室前。

「一旦家に戻って時間ズラして来たし……皆にはバレてないはず！」

ぐっ。胸の前で握りこぶしを作る。

ふふん。ウチだっているいろ考えるんだから。

さすがに、ラブレターを出したなんて知られたら恥ずかしいし、それになにより、出してるのが見つかったら、

「アキの命が無くなっちゃうしね」

まったく、男子が異常に多くなってクラスも考えものだわ。

ライバルが瑞希と木下だけっていうのは嬉しいけど、恋愛が絡むと男子がその一人を裏切り者扱いするんだもの。

「「「吉井を殺せええっ！！」」」

そうそう、こんなふうに……って、え？

「捕まるもんかあっ！」

「……………逃がさない」

「いいぞムツツリーニ。そのまま明久を追え！ その間に俺たちは隊列を組む！」

わあ、凄い（棒読み）。教室からクラスメイトがまるで軍隊みたいに一糸乱れぬ隊列で出てくる。手には銃じゃなくてカッターだけど、人一人を殺すには充分すぎるわ。

……………感心してる場合じゃないわね。

「ちよつと坂本！ いったいなんの騒ぎよ」

軍隊の先頭を歩く指揮官、もとい坂本雄二に話しかける。帽子をか

ぶってないのが残念だわ。

「島田か、今日はやけに遅いんだな」

「ええ、ちよつと用事が……って、そうじゃなくて」

こいつと話していると調子が狂う。

「なんでさっきアキが教室から逃げだしたの？」

「明久が告白されたんだ」

「隊を貸しなさい。必ず捕まえて見せるわ」

まったく、ウチがみていないと余計なことばかりするんだから。ちよつと制裁を加えて大人しくさせないと。

「坂本。相手は誰なの？」

瑞希か木下だったら、半殺しで我慢してあげなくちゃ可哀そうよね。付き合った彼氏が骨折してたら嫌だと思っし。

「いや、ラブレターだ」

「……………」

「おい、どうした島田。『もう見つかった！』なんて顔をしてるぞ。」

「……まさか」

「な、なによ？」

「明久が秘密を隠し通せるとでも思ってたか？ あいつは顔にでやすいから、何かあったら分かるのはあたりまえだろ」

た、助かったあ。

坂本の口ぶりだと、まだ送った相手がウチだと気づかれてないみたいね。なら、どうにかしてアキを捕まえないと！

「坂本。ウチ今日女の子の日なの。だから教室で静かに休んでるわ」
「おい島田。教室はあっちだ。何故明久が逃げた方向に向かおうとする」

めざといやつめ。

「まあ、一人だけで明久をボコボコにしたいという気持ちもわからんではないが、みんなも同じ気持ちなんだ。お前だけが独り占めしているもんじゃない。楽しみはみんなで分け合っべきだ」

「でも あっ！」

「? どうした？」

「いや、やっぱり兵を貸してくれないかしら」

よく考えれば、アキを半殺しにするのもラブレターが他の人に渡らないようにするのもアキを捕まえる必要があるのよね。

ってことはつまり、アキを見つけなくちゃいけないってこと。あのすばしっこいアキを一人で探すのは、疲れるし時間がかかるわ。だから、ここは坂本に従っていたほうが得策よ。

「十人くらいでいいか？」

「ええ、充分よ」

アキを捕らえたら、手紙を見られないように速やかに気絶させなくちゃいけないし。

「おし。A班、島田の指示は俺の指示だと思え！」

『『『おうっ！』』』

「みんな、絶対アキを捕まえるわよ！」

『『『おうっ！』』』

ほんとに使い勝手がいいわこのクラス。
などと思っていると、坂本がポケットから機械を取り出して耳にあ
てた。

「島田。朗報だ。明久は二階にいる」

ピッ。通信を切って、再び機械をポケットにしまつ坂本。
おそらく、情報源は土屋ね。なら問題ないわ。

「二階に行くわよ！ ついてきて！」

十人の屈強な兵士を率いて、階段を落ちるように駆け下りる。

「どつちにいるのかしら」

二階の廊下で足を止め、思考をめぐらす。

右に行けば旧校舎側、左に行けば新校舎よね。

もしもウチがアキなら……なるべく皆の裏をつこうとするわ。そう、
例えば……

「後ろ！」

「なぜバレた！？」

ここまで行動パターンがわかりやすいと、なんか面白いわね。

『いたぞ吉井だ！』

『捕まえて殺せ！』

『待て！ 奴は何か武器を持っている！』

「その言葉、少し遅い！」

アキがポケットから何かを取り出し、近くにいたクラスメイトに押しつける。

『ギヤアアアッ!』

階段から転げ落ちるクラスメイト。

『スタンガン、だと!?!』

『バカな!?! いつのまにそんな武器を!』

「死にたくないやつはどけ!」

アキがスタンガンを構えながら階段を駆け下りてくる。

『恐れるな! こちらの方が人数が多い!』

『スタンガンがない左側から攻めろ!』

「甘いっ!」

突進してくるクラスメイトを軽やかに避わすアキ。全員を避け、階段を降りおえ、ウチの方に走ってきた。

う、うそでしょ!?!?

「美波! いくら君でも邪魔をするなら容赦はしない!」

アキの右手にはスタンガン。こっちに武器は ない!?! 勝てるわけないじゃない!

なら、はやくどかないと!

ウチはすぐさま右に移動する。

「美波、さすがだね。僕の逃げる方向を先読みするなんて」

なんでアキも同じ方向に動くのよ！

ダメ！ 今から逃げたところでスタンガンに当たっちゃう！

「くらえええっ！」

「いやあああーっ！」

痺れるのが嫌で、ウチはその場に座り込んだ。

キンツ

「！！！」

「きゃっ！」

痛いわねっ！ 頭が当たったじゃない！

……って、あれ？ アキはなんで逃げたそうとしないのかな？

「……アキ？」

「……」

返事がない。ん？ アキってば、だんだんウチに近づいて来てるの？ 見間違えじゃないわ、よね？

「……カ、カウンター……（がくっ）」

「ちょ、ちよつとアキ!？」

え!？ なんでアキは、いきなりウチに覆いかぶさってきたの？

ま、まさか!？ もう手紙を読んでウチの気持ちに気付いたってこと!？ だから人目も場所も気にしないで愛を告白しようとしてる

の？

「…田」

そりゃ、ちょっと強引なものいいけど、いくらなんでもこんな人目の多い廊下で……アキのバカ！ 変態！ で、でもどうしてもって言うなら

「島田！」

「ふえっ!?!」

いつのまにか来た坂本の一言で正気を取り戻す。

い、いやだわ。なんてことを考えていたの。ちょっと冷静になろう。今日は慌てすぎだ。

「アキ、どいてくれない？」

ペチペチ。下からアキの頬を叩く。

あれ？ 反応がない。うーん、無視をしてまでウチに抱きついていたいのはわかるけど、さすがにここは邪魔よね。場所を移動させないと。

「島田、早く明久を保健室に連れて行ってやったほうがいいぞ」

「坂本！ アンタ何言ってるよ！」

保健室だなんて……色々なステップを飛ばしすぎよ！

「いや、俺は本心から言ってるんだが」

ああ、いやだいやだ。他人のノロケ話なんて聞いていても面白くないわね。

ウチも早くアキとそんな仲になりたいな。

「ったく、しょうがないわね」

とりあえず、アキをどかす。

すると、さきほどまでアキがいて、見る事ができなかったクラスメイトの姿が視界に入ってきた。

『鬼だ。鬼がいる』

『さすが島田。容赦がねえな』

『男の敵め』

? なんでみんな前かがみになってるのかしら?

「結局、何も進展しなかったわ……」

いや、どちらかといえば後退だわ。

結局手紙は坂本が外に投げちゃうし、アキはアキで保健室から帰ってこなかったし。

「……はあ」

もう何度目かもわからない溜息をつく。

目に優しい茜色の残光が顔を、古びた教室を朱色に染める。ウチ以

外はだれもいない静寂な教室。

テレビや本じゃ、ガラッとドアが開いて思い人が手紙アキを持ってきてくれるシーンだけど、

「まっ、期待するのがムリよね」

鈍感だし。

「帰ろ」

教室から下駄箱までとぼとぼ歩き、朝とは全く違うテンションで靴を履き替える。

昇降口を出て、少し歩くと頬にポツンと水滴があたった。

「あれ、雨？」

そういえば、朝の天気予報で言ってたわね。

空を見て、鞆の中を覗き、再び空を仰ぎ見る。

このぐらいなら傘は必要なさそうね。わざわざ鞆から出さなくても充分だわ。

「ちょっと、速足で帰ればいいでしょ」

雨脚が強くなったら、途中で出せばいいし。

『……………ここに……………るん……………』

「ん？」

だれの声だろうか？ 部活動の声じゃないみたいだけど。ちょっと興味があるわね。

ウチは声のする方向に歩いて行く。雨脚のせいなのか、自然に足が速まった。

「アキじゃない」

「美波」

声の発信源は校舎の近くで、そこではアキが中腰の格好で草をかき分けていた。

なんでアキが学校に残ってるんだらう？

「美波。なにやってるの？」

背筋を伸ばしウチの方を向いてくるアキ。

「それはこっちのセリフ。アキこそ、なにやってるのよ」

「僕は手紙を探してるんだ」

校舎を見上げる。確かに、ここは坂本が手紙を捨てた場所の真下だ
けど

「見つかると思ってるの？」

あれからもう何時間も経ってるんだし。他のクラスメイトに見つけられたかもしれないし、風でどこか飛んで行ったかもしれないのよ？

「わかんない。けど、このまま放っておいたら、手紙を出してくれた子が可哀そうだと思うって」

「そう」

「あれ？ 美波。なんでこっちに来るの？」

「ウチも探してあげるわ」

草が生える地面の中で手紙を探す。足はぬかるんだ地面にとられ、
バランスがとりにくい。

……こんな場所ですつと探していたんだ。

「い、いいよ。僕なんかの為に」

「アキの為じゃないわ」

「そっか。美波はその女の子が可哀想だから」

「アキが幸せになるのが嫌だから先に見つけて手紙を破るの」

「自分の為ってこと!？」

「そっよ」

そっ、自分の為なんだから。

「じゃ、ウチはこっちを探すから、アキはそっちをお願いね」

そう言っつて、アキとは反対方向に一步踏み出す。すると、

「あ、美波。そっちは」

「きゃっ!」

「こっちよりぬかるんでる、って、遅かったか。」

アキにお尻を向ける格好で四つん這いになる。

ちよつと! こっちは沼よ! 沼! ……あれ? この感触は

「美波?」

「ちよつと待って」

えつと あつた! 手に当たった何かを土の中から引っ張り出す。

「手紙だ(わ)！」

地面の中に埋まっていたのね。どつりでアキが探しても見つからないわけだわ。

おそらく埋めたのはFFFアイツラ団ね。あとでたっぷり仕返しをしておかないと。

「アキ、起こして」

手紙を出した手をアキの方に伸ばす。

「ごめんね」

ただアキはウチの手を取らずに手紙だけを奪い取る。え？ どういうこと？

ここは、強く引っ張りすぎて二人が抱き合う場面でしょ？

「じゃあ、美波。僕はこれで」

シュタツ。片手を上げて走り去ろうとするアキ。

ガシッ。その勢いを利用して地面から起き上がるウチ。ジタバタ。必死で逃げようとするアキ。

「待ちなさい」

「あ、あれ？ 美波さん。なんで握りこぶしを作っているの？」

とりあえず、殴るのは色々と聞いた後ね。

「どこに行くつもり？」

「教室に行こうかなって」

教室？

「何か忘れものでもしたの？」

「そうな」

「正直に言いなさい」

「早っ！ 早すぎるよ美波！」

坂本の言ったとおりね。すぐに顔にでるわ

「言っても怒らない？」

「怒るわ」

「えっ、怒ることは確定なの？」

当然にきまってるじゃない。

「で、何をするつもりだったの？」

「んと、この手紙を頑張って読もうと思ってた」

「その泥だらけの手紙を、今から？」

「うん」

こくりとアキがうなづく。

「だって、今もまだ、その子待っていてくれるかもしれないでしょ？ なら、早く行ってあげないと」

「……さすがに待ってないわよ」

「？ やけに自信满满だね」

「そっ？」

どんな女の子だって、こんな時間まで待ってないわよ。

「でも、アキがどうしてもするっていうなら、ウチも手伝ってあげるわ」

「それも僕のためじゃなくて、美波の為なんだよね」

「そうよ」

好きな男の子が頑張ってる姿を見たら、待っていられるわけじゃないじゃない。

「それに、女の子の字は女の子の方がわかりやすいわ。アキは少しでも早くその女の子のところに行きたいんでしょ？」

「だけど、美波が手紙を見るってことだね？」

「そうだけど、ウチが手伝わないとその分待たせることになるわよ」

「……じゃあ、お願いしてもいい？」

「もちろんよ。なら、早くその手紙を開いてみなさいよ」

カサカサ。アキが手紙の封を開け、その中身を見る。

ま、どうせ泥だらけで中身が見れないから、帰ろっつてなる

「あ、でも中は無事みたいだよ」

ウソでしょ！？　なんでこんな場所で手紙を見られなくちゃいけないのよ！　神様！　もうちょっとムードつてもものがあるでしょ！？　それ以上アキの行動が見れなくなってウチは顔を下に向けた。心臓が痛いほど暴れまわる。怖くて全身が震える。

カサカサと音が聞こえなくなった。と、いうことはもう読み終えたってことよね？

「これって」

きた！

「不幸の手紙？」

「なんでそうなるのよ！」

ラブレターと不幸の手紙を間違えるなんて、どついう神経してんのよ！

「いや、字が読みにくくて」

「……ちよつと貸して」

じろじろ。隅から隅まで見渡してみる。

読みにくい、というよりも間違えだらけだわ。よく見れば、アキの名前まで書き間違えてるし。朝にも確認する機会があつたはずなのに。

ウチってどれだけ焦っていたのかしら。

「下の方も泥で濡れちゃってるしさ。なんだか怖いよ」

泥じゃなくて……よだれよね、これ。

なんか、良かったかもしれない。書いたのがウチだとわからなくて。

「美波、それ読めるの？」

アキが尊敬の眼差しでウチを見てくる。

じつと見ていたから、読んでいると勘違いされたのかしら？

……そうよ！　ウチは日本語は書けないけど、日常会話はできるじゃない！

なら、ここでウチが読み上げればいいんだわ！

「もちろん読めるわ！」

「へえ、なら読んでくれない。女の子の字は読みにくいや」

よし、予想通りの展開。

「ちなみに、まだ女の子が待つてたらどうするつもりなの？」

「その子が許してくれるまで謝る」

「アキラしいわね」

そこまで話すと、アキがラブレターをひろげてウチに見せてきて、そのまま読めない字に指をさした。

「美波。これはなんて書いてあるの？」

「それは『スキ』って書いてあるのよ」

指された字を読み上げるウチ。

「これは？」

「それは『放課後』って書いてあるのよ」

「あ、そう言われるとそうだね」

本当は『フキ』と『遊果後』って書いてあるんだけどね。

ああ、こうやってアキと二人つきりで勉強をやるのもいいわ。

「美波、これは？」

「それは『下駄箱』よ」

教えるのは多分数学になると思うけど、仲良く寄り添って教える。そうよ、別にウチが教えなくてもいいんだわ。日本史はアキの方が得意だし、メガネをかけたアキに教わるってのも魅力的だよな。

「美波。これは」

「それは『愛してる』よ」

勉強って言えば、自然にアキを家に連れてきても不思議がられないし、アキの家に行ってもなんの不自然でもないわ。

「美波。なんでそんなに読めるの？」

「それはウチが書いたからよ」

「ふん」

ウチが家事をしている時に、アキが子供にお勉強を……あれ？ いまなんて言った？

「つて、ええ！？ ま、まさか美波は僕の事が」

「ち、違うわよ！ ちょっと最近苛め方が単調だったから。一度上げてから落としてみてもいいなって思っ」

「そうだよ。美波が僕の事を好きなんて、そんなわけないよね……」

「そうよ。ウ、ウチがアキの事好きになんてなるわけないじゃない……」

ああもっ！ なんて素直に『好き』って言えないのよ！！

「はあ……で、傷心したウチにアキは何をしてくれるのかしら？」

「ええっ！？ なんて！？」

「なによ。アキが言いだしたんじゃない」

「だって、あれは僕を痛めつける罠だったんでしょ！」

「傷ついたことには変わらないもの」

実際、教室ですつと待ってたし。

「うぐっ……ちょっと待って」

うっーっ、と唸りながら必死で謝罪を考えるアキ。

ウチとしては、どんな謝罪でもいいんだけど……アキのことだから、宿題をやってくれるとかそんなところよね。

そんなことを考えていると、いい案が浮かんだのか、アキがポンッと手を打ちウチの方を向いた。

「じゃあさ、喫茶店でケーキでも食べようよ。もちろん僕が奢るからさ」

え、それって……。

「ふ〜ん。アキはかawaii乙女が傷ついたら食べ物で懐柔するつもりなんだ？」

「ち、違うよ美波！ そんなわけないじゃないか！」

「なにが違うのよ」

「美波がかawaiiなんてありえない！」

「なんですつてえーっ！！」

「み、美波！ その関節はそっちの方に曲がらなっ………！」

ま、これでいつか。

『ねえ、アキ?』

『なに?』

『ウチ、今日傘忘れちゃったの。一緒にいれてくれない?』

『うん。いいよ』

『ありがとう』

(後書き)

初めましての人も初めましてじゃない人も初めまして。

NYOといえます。

今回で短編も十作目。一万文字くらいなら書くのにも慣れてきました。

心情面で話しを進めると、どうしても会話がなくなりますね。まあ、会話を多くすれば独り言をたくさん喋るイタイ人の出来上がりですが。

初めての美波主人公作品。

原作にたちかえり、ドタバタ劇をいれました。果たしてバカテスの感じが伝わりましたかね？

女子勢じゃ満足に動かせるの、美波だけなんですよね。

純粋な恋愛は他の作者様に任せるとしましょう。

美波。いつか君が輝く日を作ってあげるからね(ホロリ)

現在 主人公になった人。

基本メンバー(姫路以外)全員

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2068p/>

バカとテストと召喚獣 ~ウチと決意とラブレター~

2010年11月29日05時23分発行